

MY FIRST INDIA

地域文化コースアジア研究3年 松浦 泉

左上が三分の一程かけた上弦の月がはなつ光は、沐浴場のさぎ波が立った水面に乱射されている。その光は、日本のまちでは楽しむことのできぬ弱い小さな星の光までも伝えることができる澄みきった空気を通って沐浴場のサイドに並んだ十本程のやしの木の枝を海からの風がゆらしているのも照らす。沐浴場は、ベンガル湾の海岸に立つ今は遺跡となった寺院から砂丘を十分歩いた所にある。私は沐浴場のガードの上から二番目の階段に腰をおろして二本目のタバコに火をつけた。

ここはマニラやバンコクあたりの緯度をもつ南インド最大の都市マドラスからバスで南へ2時間走ったマハバリプーラムという遺跡の村である。九世紀頃まではアラビアや東南アジアとの通商で栄えた港であり、八世紀から九世紀にかけて造られた建築物や遺跡を残している。現在はこれらによる観光地として有名になった。しかし、インドの他の観光地では観光以外で生活している人間の方がはるかに多いのに対して、マハバリプーラムではそういう人間が少なく、ホテル、食堂、みやげ屋、ガイドなどを除いたら寒村以下の小さな村になってしまう。私の唯一の目的は、ここを訪ねる他の人と同じように石造の海岸寺院であった。陽の落ちる時に砂丘の終り端にはえたやしの木々の中に沈んでいく日本のそれより一倍半もあろう太陽を肩にしたこの遺跡を何枚もフィルムにおさめた。

今はもう夜の十時だが、お茶屋の電灯は客が5～6人いることを教えてくれる。大声で騒いでいるインド人もいる。3月2日に羽田を立ててその日の終り頃にボンベイに到着してから始まった私の南インドの旅は今日で終ろうとしている。十日程した3月28日早朝にデリーから日本へ帰るため、その間北インドを少し見てまわろうと思い明日マドラスをたつ汽車の予約はすでにとっておいた。あすの月夜もここで味わいたかったが、残念だ。

インドのまちはなかなか寝しずまらない。マハバリプーラムもそうだ。確かにみやげ屋は9時には店を閉めているのが多かったが、お茶屋はにぎわっている。インドのお茶は、ミルクと砂糖のたっぷり入

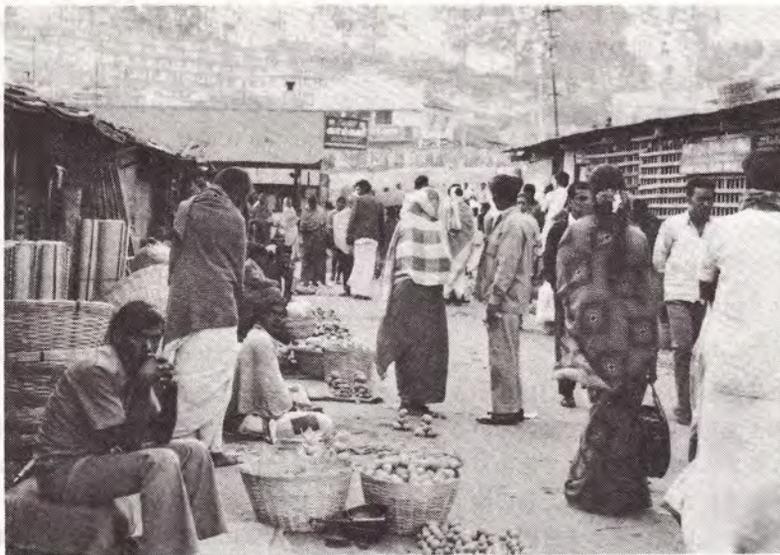
ったあまったるい紅茶で、これを中部以北では“チャイ”というが、南の北への対抗意識は“ティー”といわせている。又、北ではコーヒーよりもチャイが主流だが、南ではコーヒーの割合が多くなる。呼び方も、北では“コッフィー”であるのに南では“カフェー”である。フランスの影響がはいっているのだろうか。又、稲作と麦作の差であろうが、南ではカレーと米だが、北ではカレーとチャパティーだ。チャパティーは、ひえやきびが入ることもあるが、主に小麦粉を水でねって薄く焼き上げたもので、お好み焼きの野菜や肉など具の全くないものと思っただらいいだろうか。それでカレーを包むようにしてはさんで口の中に入れる。米を食べる時は実ににぎやかなものだ。カレーをご飯にかけ右手でこねまわしてから、やっと思える。カレーでご飯に味つけでもするのだろうか。なかには、ヨーグルトみたいなものまでそうするインド人もいる。北インドでは知らないが、南では“カナ”といって定食みたいにして、ご飯と2～3種類の野菜カレーがセットになって安く食べられる。小さな町の食堂では、バナナの葉をテーブルにのせ、それにボーイが大きな容器からついでくれる。インドカレーは辛いといわれるが、決して食べられない程の辛さではない。慣れてしまえば辛いと感じない。だから日本へ帰って食べたカレーライスがなんと味の無い刺激の無いものかと感じたことをよく覚えている。日本のカレーのように小麦粉を入れてドロドロとしたものにしたのはイギリス人の発明だそうだが、インドカレーは一種類の具を入れたスープみたいなものだ。生協のカレーよりもはるかに薄い。ご飯にみそ汁をかけて食べるようなもので、確かに満腹するのだが、どうしても食べたという気にはなれなかった。日本を出る前に、インド料理だけでは体が弱くなるから大きな町では中華料理や西洋料理を食べて精気を回復しなさいといわれてきたが、そのことを実際インド料理ばかり食べてやっと思わった。一皿の焼きめしは疲れた私の諸器官の働きを正常にしてくれた。

一つの食事体系から別の体系へ移る時、消化器官はなかなか同調してくれないものらしい。その点観念の方は便利なもので、私の場合ある程度の子備知

識もあったし、日本人としてはひねくれた考え方をしていたため、インド文化への嫌悪感は最初から全くなかったと思う。一つの文化から別の文化へ移る時に伴うカルチャー・ショックがなかったことは幸運に思えるが、大きな驚きの感情を伴わなかったことは、今にして思えば貧弱な経験にしかになっていない気がする。私のあまりにもさめた性格のためだろう。従って一部のインド旅行者のように、インド文化にぞっこん惚れ込むということもなかった。そういう私の目からみたインドは、決して日本とは全く異なった国ではなかった。あたり前だが、顔には目も鼻も口も耳もちゃんと日本人と同じだけ、同じ所についている。手だって足だってある。顔つきだって、欧米人をいかめしくした程度で、中東の人間と変わらないし、写真やテレビで見慣れている。確かにボンベイやデリーのような大都市では路上で生活する者も多いが、日本でもレストランのごみ捨て用のポリバケツをあきっている者がいるではないか。乞食で生活している者は決して珍らしくない。職を求めても得られず、浮浪して世間から脱落していく別世界の人間のように思われている日本人もいる

ロリー計算第一主義としてきた栄養学は糖尿病を始め諸々の病気を続発させてきた。一日のカロリーが1500の人間も3500の人間も同じ程度に生きているし、同じ程度に病魔がとりまいている。貧困は経済力だけで判断するものとしても、異なった社会間を同一のものさしで計ることは問題だ。私の出発前には、1ドル=240円だったのが、帰国後には1ドル=220円になった。一ヶ月もしないうちに、日本人がその時特別一生懸命に働いた訳でもないのに、一割も交換レートが変わった。又、一定の金でも使い方がいまいちでrichにもpoorにもなれる。インドは経済的に貧困だが、ただそれだけの意味しかない。

インド人は人が悪く、不親切だという。他人のものを平気で盗むという。盗みは、金の交換なしで所有者が変わることだ。物の移動にすぎない。自分のものは自分で管理しなければ、いつ自分から離れるかわからないということはどここの社会でも共通することではないのか。盗みは自分のものでないものを交換の契約なしに自分のものにする事だ。これは歴史的にも誰もが合法的に常におこなっている。その最たるものが資源開発というやつで、石油を“盗み”



南インドニルギリ高原のバザール

実際は知らないが日本の敗戦直後の方が、はるかに一日の食に困窮していた人間の割合が多かったのではなからうか。インドの路上生活者は歩道の端や広場で毛布をかぶって夜を過ごす、メシにありつけないという様子はなかった。彼等の食事のカロリーが極めて少ないから栄養失調だと言う人もあるが、カ

掘ることで国際経済が動いている。我々の先祖は木の実を“盗ん”で生活してきたし、我々の子孫は我々以上に多角的に太陽エネルギーを“盗む”であろう。盗みの観念は人間の所有の意識の産物だ。インド人が不親切だというのは私の印象と全く異なる。ボンベイで駅がどこにあるか尋ねたが、わざわざそ

こへ連れていってくれた人もあったし、汽車の予約をする場所がわからないのできくと、その場所へ行って予約のとり方まで教えてくれた人もあった。彼等は身なりのいい人達だったせいもあるかもしれないが、そういうことは金と時間に余裕があり確かなことを知っておれば充分親切だということになると思う。実際、裕福でない人からも親切はいくらでもうけた。彼等がそれを親切を意識してやったかどうかはわからないが、押し売りのような過剰な親切はうけなかったし、みなかったが、そのことはインド人の親切は最も適度なものであるということになりはしないだろうか。

インド人は怠け者か？ 出発前は私も漠然とそう思っていた。しかし私の目に入った範囲では、少なくとも自分がすべき仕事をやらずにブラブラして怠けている人はいなかった。自分の仕事以外の他人の仕事までするという例もみあたらなかったが、これはおそらくカースト制度の分業体制のため他人の仕事をするのはタブーであるためだろう。だから他人の仕事に関係しなければ、気が向いたらやるのではないかと思う。親切行為がその例だと思う。自分に課せられた仕事でもなく、他人の仕事を直接的に奪う訳でもなく、自分の利益にもならないことをすること。例えば、レストランでカレーを食べる時私はいつもボーイにスプーンをもってくるように言ったが、彼等は拒否しようと思えばできると思うが、ちゃんと文句もいわず喜んでもってきてくれた。これは親切の範囲に入らないかもしれないが、自分に課せられた以上の仕事をしている例になる。この程度のことはいくらでもみられた。食事時には食堂は客が増えるが、日本と同じようにボーイが忙しく注文に応じていた。決してユックリズムではなかった。

日本人の一般的なインドのイメージを出発前までは私も持っていたが、一人でインドを旅してその生活の一端に触れるだけでも、そのイメージのいいかげんさがわかった。その意味からも外国へ行くことは貴重な体験になるのではなからうか。いわゆる“独断と偏見”でもいいからよその社会の自分なりのイメージを握むことは自分のものの考え方の表現であるから意味のあることと思う。もっとも、一人の“独断と偏見”による“何々国観”が定着するのは困るが。又方向を逆にして、“私の何々国観”から自分の“独断と偏見”の方向に目を向ければ、自分独特なものの考え方がリレーされるのではな

らうか。

マハバリプーラムの月が子午線を横切ってもまだ人の声がある。今日もきのうと同じく夜ふかしをしてしまった。前の経験から睡眠不足と刺激の強いインドカレーが私の消化器官の働きをにぶらせ下痢をひきおこすことはよく知っている。あすは日出の海岸寺院の写真を撮りたい。6時に起きて二回目の下痢が再び3日間続くかもしれない。しかし魅せられたものの吸引力は強いものだ。理性では出発を一日遅らすべきことをよく知っているが。

案の定、翌日しだいに腹の調子がおかしくなり、微熱も伴いだしてきた。マドラスを午後3時に出た汽車の陽にうたれた窓わくに重症患者以上の感覚で頭を置いて苦痛の四十分間の末、トイレにかけこみ自分の不消化物を処理した。すぐさま、ふだんでもセットされている誰も使っていない三段目の寝台を見つけ、自分の席の隅にちらけてあった帽子やガイドブックやメガネをほおっておいて、その寝の堅い板の上で汗をかきながら身を横たえた。

香港から1時間もすると、薄黒い雲海に沈みかけてゆく太陽とそれに照らされた夕焼け色の雲がなす夕景色が、窓から二番目の私の席にも展開する。かつてよく旅から帰る長距離急行の窓から田圃に落ちてゆく夕日をながめながら旅の感傷にいい気持ちになっていた時のように、この単純な夕景色は旅の終りを私の心にしみじみさせるものを伝えていた。

